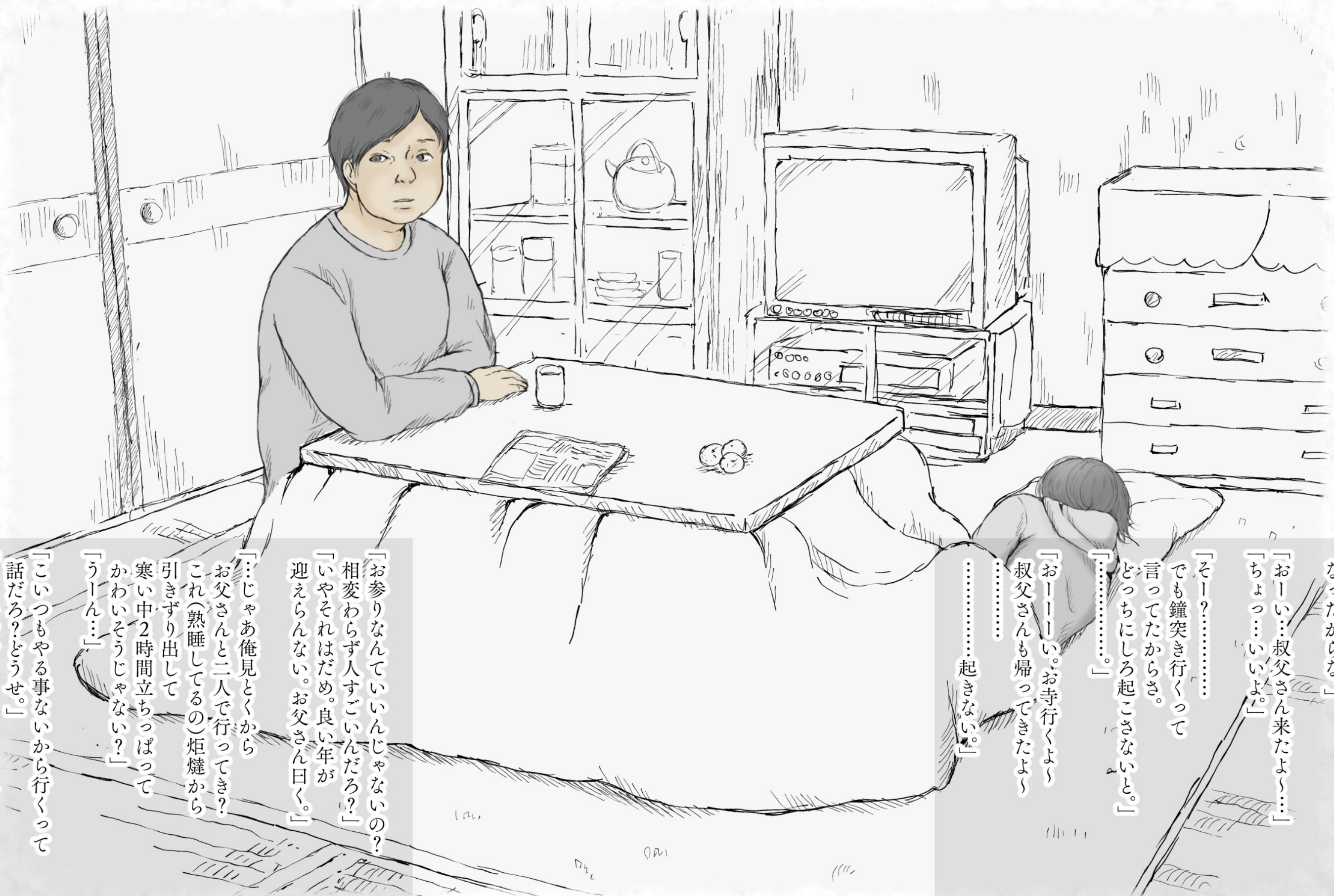




炬燵と姪と、
コタツとメイト

冬の夜。
フユノヨル

— 憧憬 —



「さっきまで起きてただけとねえ…

久しぶりに会えるって

楽しみにしてたんだけど…」

「へえ…そうなんだ。」

言ってたよりだいぶ遅く

なったからな。」

「おーい…叔父さん来たよ…」

「ちよっ…いいよ。」

「そー? ……」

でも鐘突き行くって

言ってたからさ。」

どっちにしろ起こさないと。」

「……………」

「おーい。お寺行くよ」

叔父さんも帰ってきたよ」

……………」

……………」起きない。」

「お参りなんていいんじゃないの?

相変わらず人すごいんだろ?」

「いやそれはだめ。良い年が

迎えらんない。お父さん曰く。」

「:じゃあ俺見とくから

お父さんと二人で行ってき?

これ(熟睡してるの)炬燵から

引きずり出して

寒い中2時間立ちっぱって

かわいそうじゃない?」

「うーん…」

「こいつもやる事ないから行くって
話だろ? どうせ。」

「……いやでも……………うーん……

そうしよっかあ……」

目さめてから怒らないかな…」

「たい焼きとか買っというてやったら?」





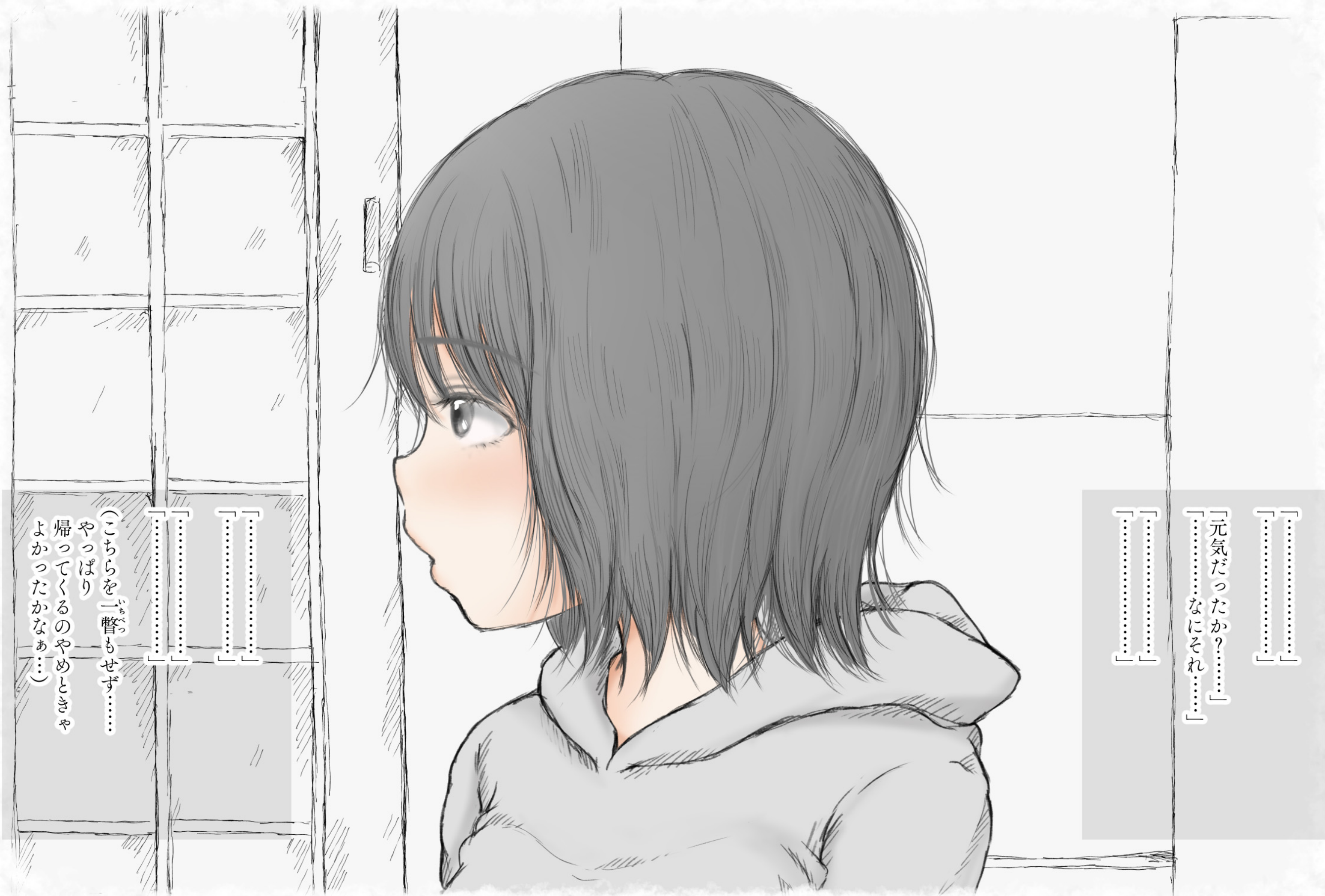


「ふぁ……………」
「あ…起きたか？」

「……………」
「おばあちゃん達、出掛けてったぞ。」
「……………」
「うん……………」

「……………」
「久しぶり。」
「うん……………」

「……………」
「……………」



（こちらを二瞥もせず……
やっぱり
帰ってくるのやめときゃ
よかったかなあ……）

「元気だったか？……」
「……なにそれ……」

「……」

姉ちゃんの娘、姪であるこいつと
ちょうど今のように
年末の真夜中を二人だけで
留守番していた3年前の事。

姪はおよそうちの家系の遺伝子で
咲くとは思えない端麗な面持ちを
しているが

人見知りが激しく往々にして
他人につっけんどん。

しかし何故か俺に対しては懐っこい。

叔父の立場からすれば
誰に対してもという訳ではないが
優越感に浸れるかわいい身内だった。

そんな折り、仕事からの解放感と
少しばかりのアルコール
単純に溜まっていた性欲が絡み合い
閉じ込めておかなければならない
倫理の封が、いたずらに、あまつさえ
血縁に対して開いてしまった。

こういうのを魔が差したと
言うのだろうか。

小児性愛。
人には言えない俺の魂欲。

開眼のきっかけは広く普及し始めた
インターネット。

その魔法のシステムは今まで触れ得なかった
新しい知識や世界に、机に座ったまま
それも毎日と出会え
多くの興奮や感動を次々と与えてくれた。

そんな日々のある土曜日。

テレホタイムの落ち着いた
深夜とも早朝ともとれない頃合いに
いつものように
ネットサーフィンをしていた時
何となしに『その』ページへ行きついた。

そこにはいやらしさの欠片もない
澆漓とした少女が
全裸になり、何もかもをあらわにしていく
そんな写真群があり
その異文化に、そこはかとない
淡い桃色のような衝動を覚えた。

年齢は10歳ぐらいに見えた。
小4〜5年生。

そんな歳の子に性対象としての価値など
あろうはずもないし
その時の俺自身にもなかった。

しかしいざ狙って検索してみれば
山ほど出てくる児童ポルノ。
その層向けのページには
自分の値打ちを知っているかのように
見るものを挑発する少女の写真や
大人との行為に大人のそれのように
喘ぎ果てる子供のセックス動画が
置かれており

和モノ3、洋モノ7ぐらいの割合で
好きなだけ手に入れられた。



開眼した目線で世間を見てみると
例えば民法のテレビドラマ。

あるシーンでズボンだった女の子が
次のカットで不自然にも
スカートの着替えていて
無防備に開かれた股ぐらから
子供パンツが露わに映される。
ゴールデンタイムにやってる
ドラマで、だ。
そういうステルスロリが
様々な媒体に散見される
仕込まれている事に気づく。

つまりは、この性的嗜好には
潜在層が実は大量におり
非属性の人や女性の皆々様に対して
正当化するつもりは無いが
この感性そのものは
世界中で大昔から多くの男性が
持ち合わせているものだと思った。

その免罪符的な知識は
俺がロリコンをこじらせるための
堅牢な土台となった。

そして問題の当夜：

「大丈夫か…?」

「…はあ…はあ…う…ん…はあ…」

「イけた…?」

「…はあ…はあ…うん…」

手を出し拒否されても

見ず知らずの子を相手にするよりは

事の露見を封じる工作は

しやすいだろう

そんな浅ましい計算が確かにあった。

ちよつとしたお触りから

こそばしあい

やがてお膝抱っこに移行。

自分から誘導しておいて

やめろよ重いから、なんて芝居がかった

ある種ばかりらしい空気のなか

でも心臓はドキドキバクバク。

あっ！

いあっ！

鼻先にあるさらさらの髪からは
母親とは違うシャンプーの匂いがして
あれ、この歳で自分用のものを
買って使ってるのか?と
少しでも大人びた要素を見つけては
期待が膨らんで

やがてそれとなく会話を性的な
方向へ促していくと…

『自慰はときどきしている』

小四、10歳姪っ子の衝撃の告白に
頭の中が真っ白に
なったのを覚えてる。

「自分でするより
気持ちいいだろ?」

「……うん……」

「…あのさ…もっと気持ちいいの
してやろうか。」

「…どんなの?…」

「舌を使うんだよ。」

「…した?…ペロ?なめる?」

「そう。するか?」

「えー………うん……」

掛け時計がさしていた時刻を
いやにはっきりと覚えている。
23時50分だった。
秒針のかちかちという音が耳についた。

やめなければという
思いを底に敷き

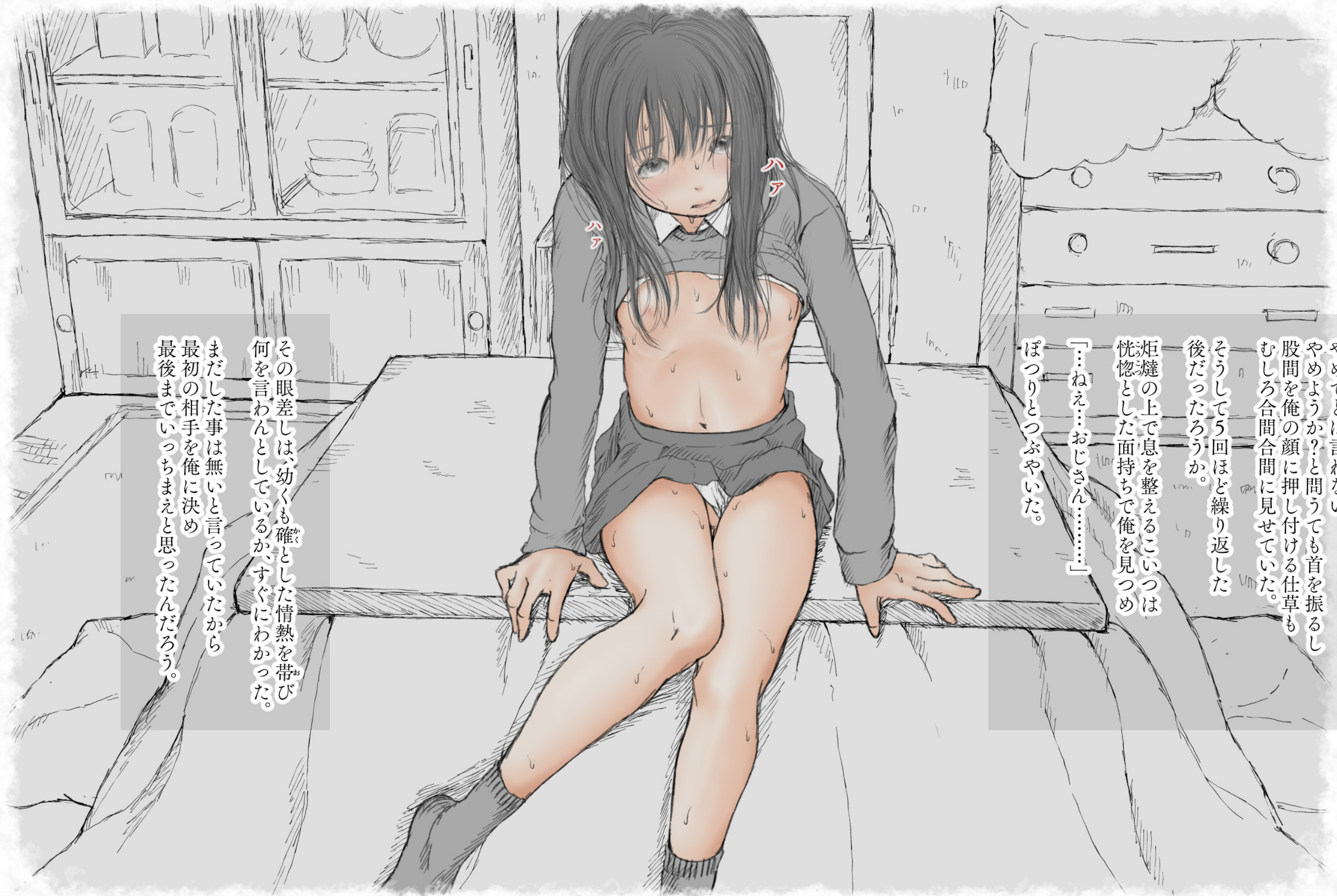
これを逃せばこんな機会は
もう一生ないだろうという焦りの中で
上手くいけば秘密の関係を
成立させられるかもしれないという期待。

俺自身の満足より
姪をいかに誘うか
そればかりが頭をめぐっていた。

炬燵の上に座らせ、足を拡げさせ
子供パンツを指で寄せて
濡れて、蒸れたそこへ舌を這わせる。

だいたい1回イカせるのに15分程
かかった。
まだイキ慣れてなかった。
悶える動作にも無駄が多い。
少し休んでまたイカせる。
それを何度も繰り返した。
俺はその年を小学生の姪の股間に
顔をうずめて越したんだ。
全身に汗をべつとりとかき
力みきった四肢の筋肉に相対して
緩んだ口元。
そういうば途中からいくのが怖いとも
言ってた。
自慰とは違い、快感の、自分にいい度合い
というものを
自分の好みに合わせてコントロールできず
俺のやり方だと
達した時の衝撃が強すぎるらしい。
まさに怖いくらいに。





しかし姪はそんな風に告げながらも
やめてとは言わない。
やめようか?と問うても首を振るし
股間を俺の顔に押し付ける仕草も
むしろ合間合間に見せていた。
そうして5回ほど繰り返した
後だったろうか。
炬燵の上で息を整えるこいつは
恍惚とした面持ちで俺を見つめ
「…ねえ…おじさん………」
ぽつりとつぶやいた。

その眼差しは、幼くも確とした情熱を帯び
何を言わんとしているか、すぐにわかった。
まだした事は無いと言っていたから
最初の相手を俺に決め
最後までいっちまえと思ったんだろう。

もちろんこちらとしても
近しい血縁だという要素をのぞけば
べっぴんさんの子供と
経験できるのに不服などない。

しかし単純だが如何ともしがたい
問題があった。

どう考えても姪の性器が小さすぎる。
姪のここに俺のは入らない。
ゆっくりと日数をかければ
もしかして可能であろうが
このままの流れでセックスを
成立させるというのは無理があった。

指でいじってる段階で
それはわかっていたから
痛みだけしかないだろう挿入は
早々にあきらめ
次に繋げる事を考えていたんだ。

肝要なのはこの小児性近親姦淫に
前向きな興味を
持たせたままコトを終える事。
大人と子供の逢瀬には
丁寧な準備が必要だと理解した。

「鼻血出てるぞお前…」

「え……あ……」

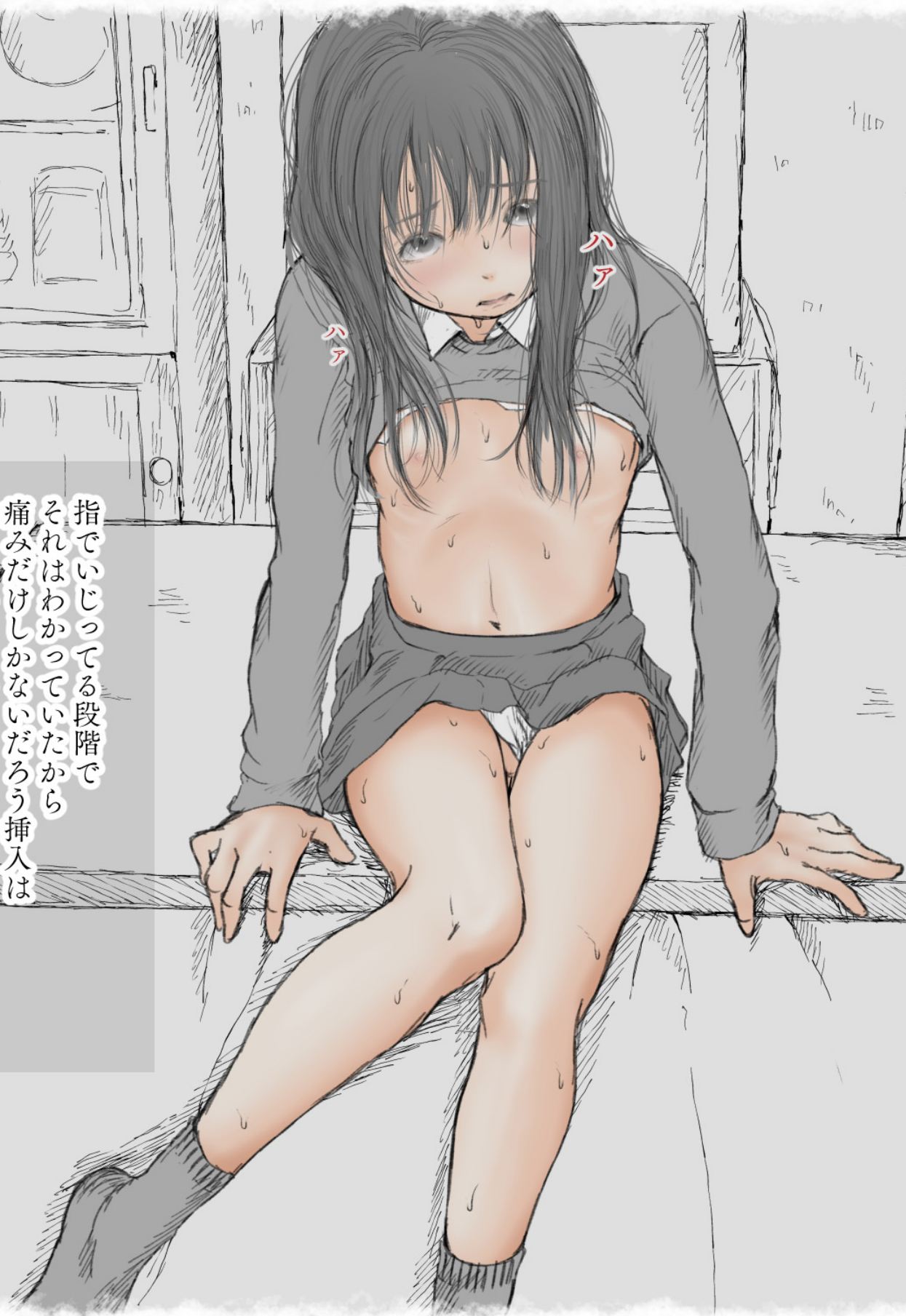
「…いやほんとのところ

俺もしたいんだけど……うーん……

さすがにまだ4年生だからなあ…」

今日はこの辺で、この良い雰囲気のまま
治めておきたいと誘導し始めたその時…

「ただいま」



姪の母親である俺の姉ちゃんと
父さん母さんが
近くにあるお寺の鐘突きから戻って来た。

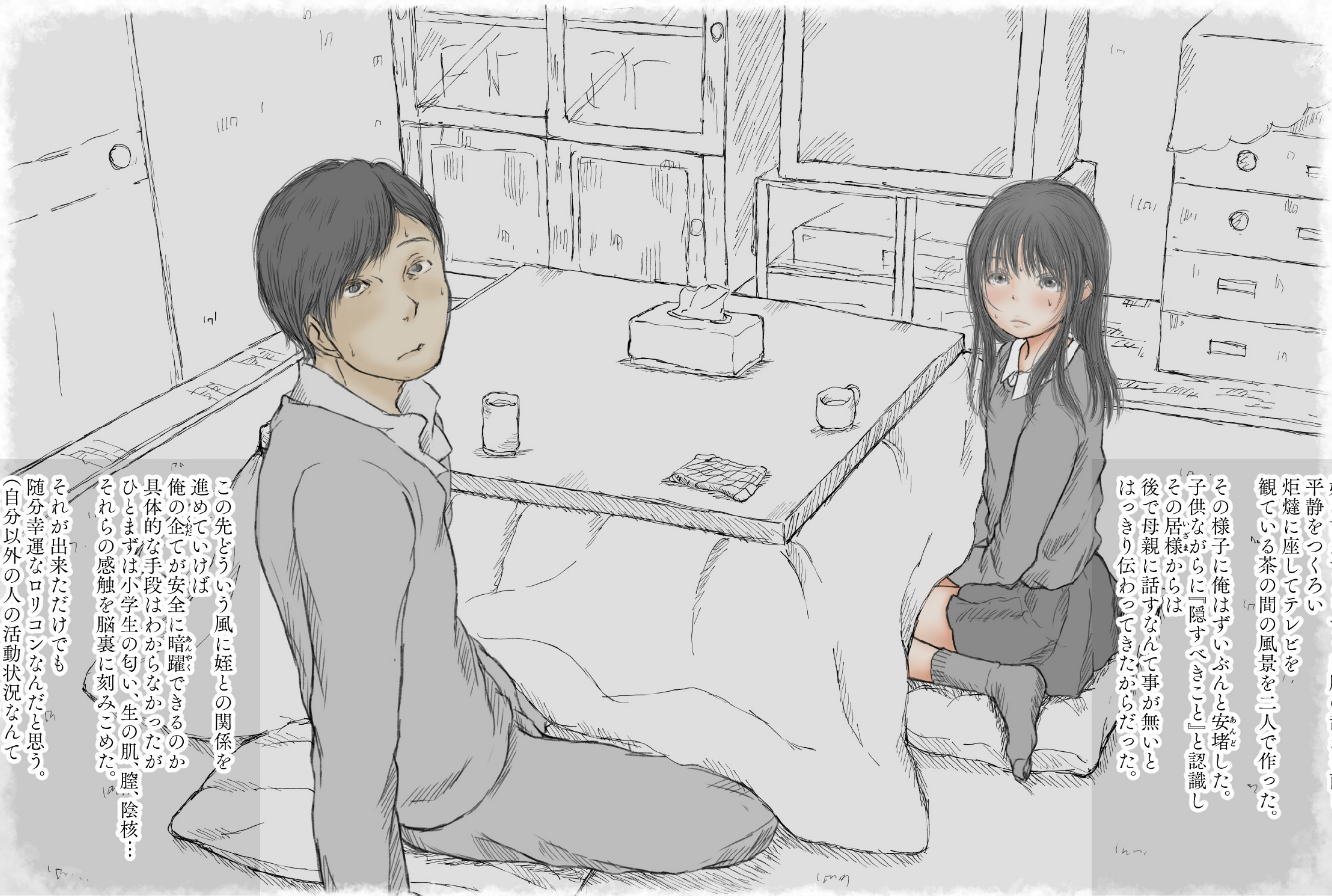
玄関の引き戸の開く音が聞こえたたん
姪は言わずともすぐに服の乱れを直し
平静をつくろい
炬燵に座してテレビを
観ている茶の間の風景を二人で作った。

その様子に俺はずいぶんと安堵した。
子供ながらに『隠すべきこと』と認識し
その居様からは
後で母親に話すなんて事が無いと
はつきり伝わってきたからだった。

この先どういう風に姪との関係を
進めていけば
俺の企てが安全に暗躍できるのか
具体的な手段はわからなかったが
ひとまずは小学生の匂い、生の肌、膺、陰核……
それらの感触を脳裏に刻みこめた。

それが出来ただけでも
随分幸運なロリコンなんだと思う。
(自分以外の人の活動状況なんて
全然わからないんだけど。)

しかも相手もノリノリ。
今後の展開を妄想し口元の緩む
夢いっぱいの元日深夜を過ごした。



年明け4日まで実家に居たが
その間それ以上の進展はなかったし
姪とアレの続きに関して話す事もなかったが
時折じいっとこちらを見つめてくる
彼女の視線に
期待はますます膨らむばかりだった。

「……いや……なんでもない……」
「なんだよ？ 気になるから言えよ。」
「なんでもない。」
「ねえ、あんたさ……」
「なに？」
「玄関で、ふいに姉に呼び止められた。」
「アパートに戻るその朝の事。」
「実家から自分の住んでる」
「そう上手く運ばない。」
「何事においても画策というものは」
「しかして……やはりと言うか。」

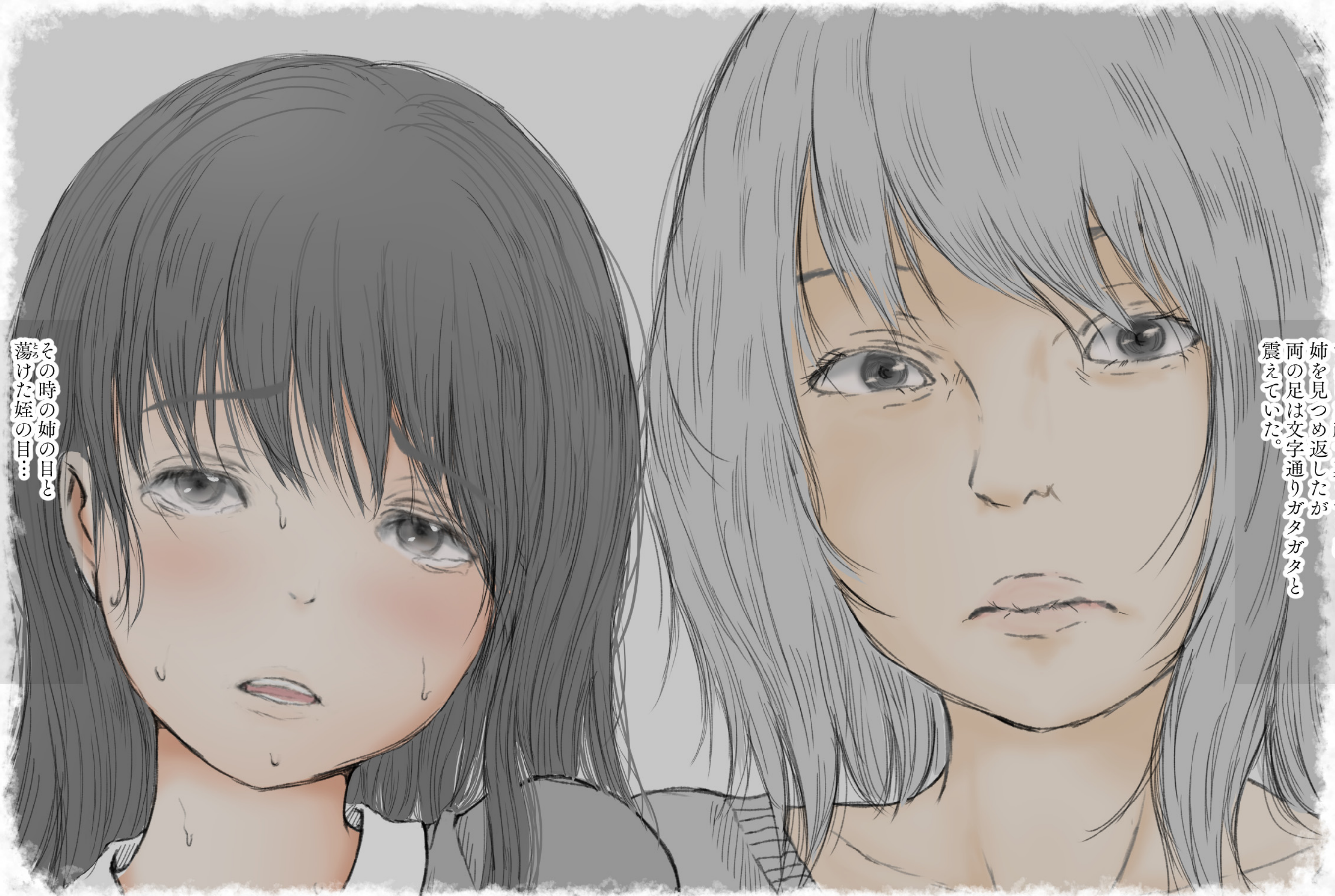
「なんでもない。」

言いたいことは明らかだった。
『何かあった』とはっきり疑っている。

俺は潔白^{けっぱく}を演じ示すため
すました顔で真っすぐに
姉を見つめ返したが
両の足は文字通りガタガタと
震えていた。

その時の姉の目と
蕩けた姪の目：

それからしばらくは
何をやっていても
その二つが四六時中
頭の中で行き来していた。



子供の気持ちの変化は烈しい。
例えばあの後、数日後に
再び会っていたとして
あの続きが始まったとは限らない。
時間が経つにつれそんな心持ちに
なりはじめた。

実家に電話をするのはおかしくないが
姪と代わってくれというのは
なぜ？となる。

会話一つできないんだ。
その後の心内も推し量れない。

手紙なんて書いて実家の誰かに
インターセプトされたら
三徳包丁を持った姉ちゃんが
俺の部屋の呼び鈴を鳴らすだろう。

結論、しばらく帰省せず
実家に立ち寄る事も一切やめて
全てのほとぼりを冷ますという
安全策を選択した。

そして月日が流れた。

いつまでも嘘の用事を
作り上げ
母親に顔を見せないというのも
よろしくない。
どこかで決着をつけておかなければ。

そんな決心で
今年、3年ぶりに実家に戻って来た…
わけだけと…



「……………」

「……………生まれ育った
自分の家とは思えない
居づらさ…」

あの日の事を
今はどう思ってるんだろう。
弄もよほばれ怒こっているのか
傷つき顔もみたくないのか
あるいは関心すら無くなってるのか
…全くわからん。



雰囲気も随分変わったな…。
小4から中1になったんだから
そりゃそうか。
彼氏がいてもおかしくない。
いやいるだろう。
こいつはますますもってかわいい。
少なくともあの続きをなんて
もう絶対にありえない。
起き得ない。
それだけは、はつきりと判る。

あれに関する話は切り出すが
それはこのぎこちなさを
終わらせたいからだ。
未練があるからではない。

「……………あ。」
「な、なんだ？」

「おじさん……………」

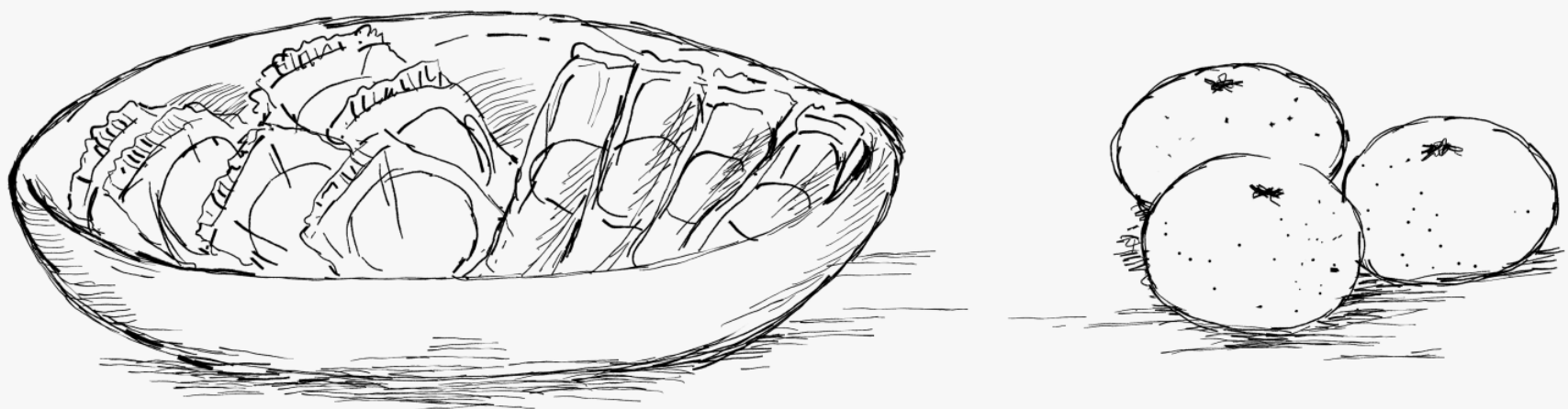
「もしかして
何も食べてないんじゃないの？」
「え？…あ、ああ…食べてない。
ずっと移動だった。」

「なんか作ろうか？」
「りよ、料理できるようになったのか？」



「料理ぐらいできるって。
あたしだっていつまでも
子供じゃないんだよ。」
「そ、そうだよな。
ありがとう、お願い。」

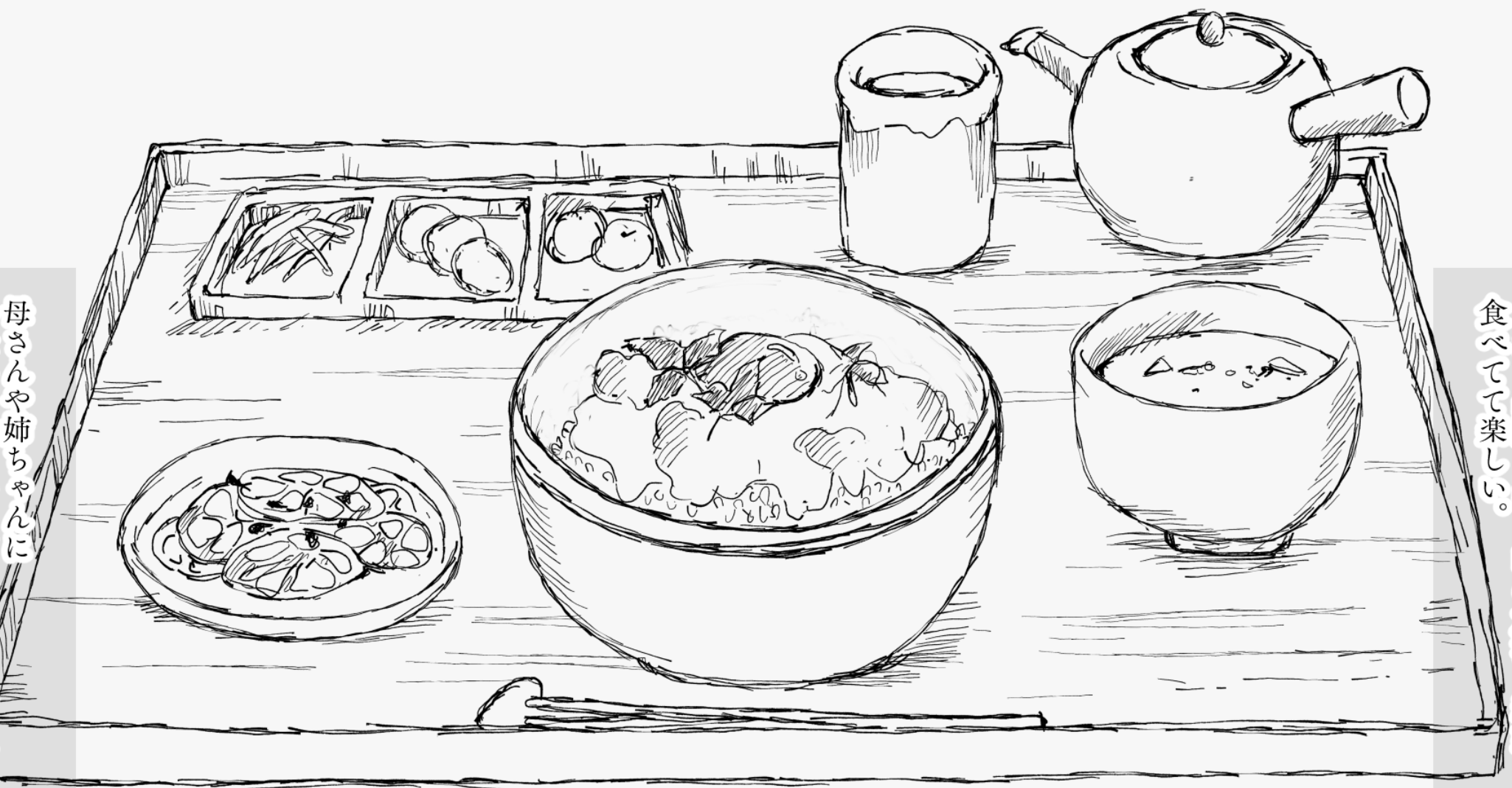
（目を直視できない…）



手際良く調理された食事を
机に並べてくれたあと
炬燵で汗をかいたからと言って
姪はシャワーを浴びに行った。

「美味い……」

この軽食、ちょっと驚いた。
数時間後に寝るだろう事が
配慮された量でありつつ
しかし品数も出し、味の加減も絶妙
食べて楽しい。



母さんや姉ちゃんに
手伝わされている内というんじやなく
能動的にやっている人の料理だ。

（なにより姉ちゃんや母さんに
盛り付けのこんな感性はない。）

小学生の頃は時に多動で
心配になる事もあったが
このまま成長すれば
なんていうか、いいお嫁さんにな
りそうだなあ。

（やっちゃったなあ……そんな子に……）

「さて：どうしよう：」

（そっけないのはそうなんだが
嫌悪感向けられてないと思う。
かといって忘れているなんて事
あるわけないんだから：

二人きりのうちに話を切り出して
白黒つけとかないと

この先ずっと気まづいままだし：

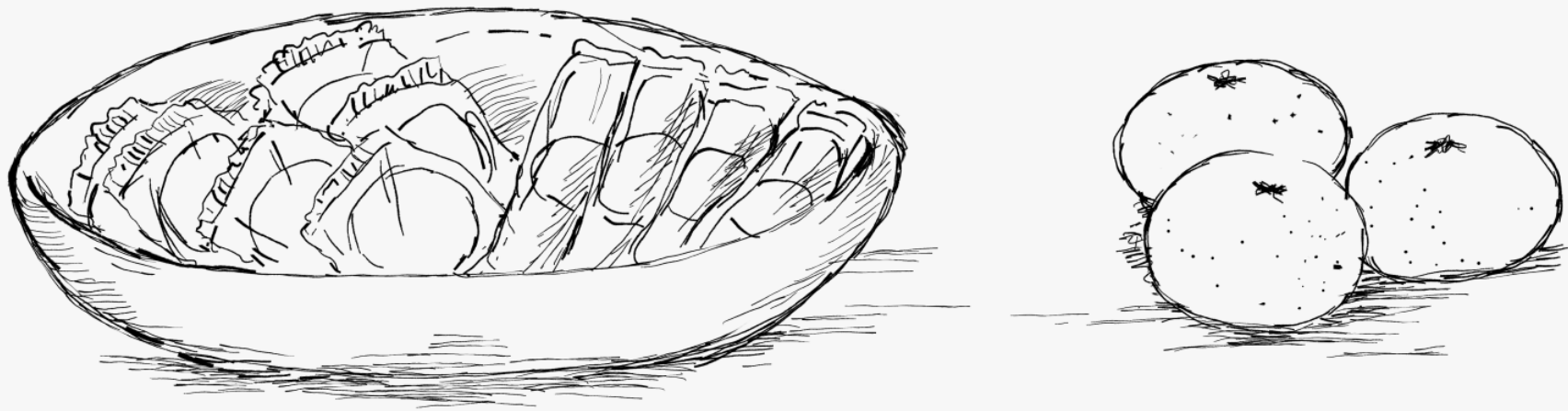
今のところはあの時の秘密を
誰にも話してないようだけど：

釘を刺していない以上

これから先もしやべらないとは
限らない：

うん：やっぱりちゃんとしく
べきだ：）

「よし……あ……」



（いや：までよ：

もし『忘れたい』と思っているなら
触れない方がよくないか？
実際3年も前の事なんだ。

そうだよ俺の都合ばかりじゃなくて
こいつの気持ちも考えなきゃ：

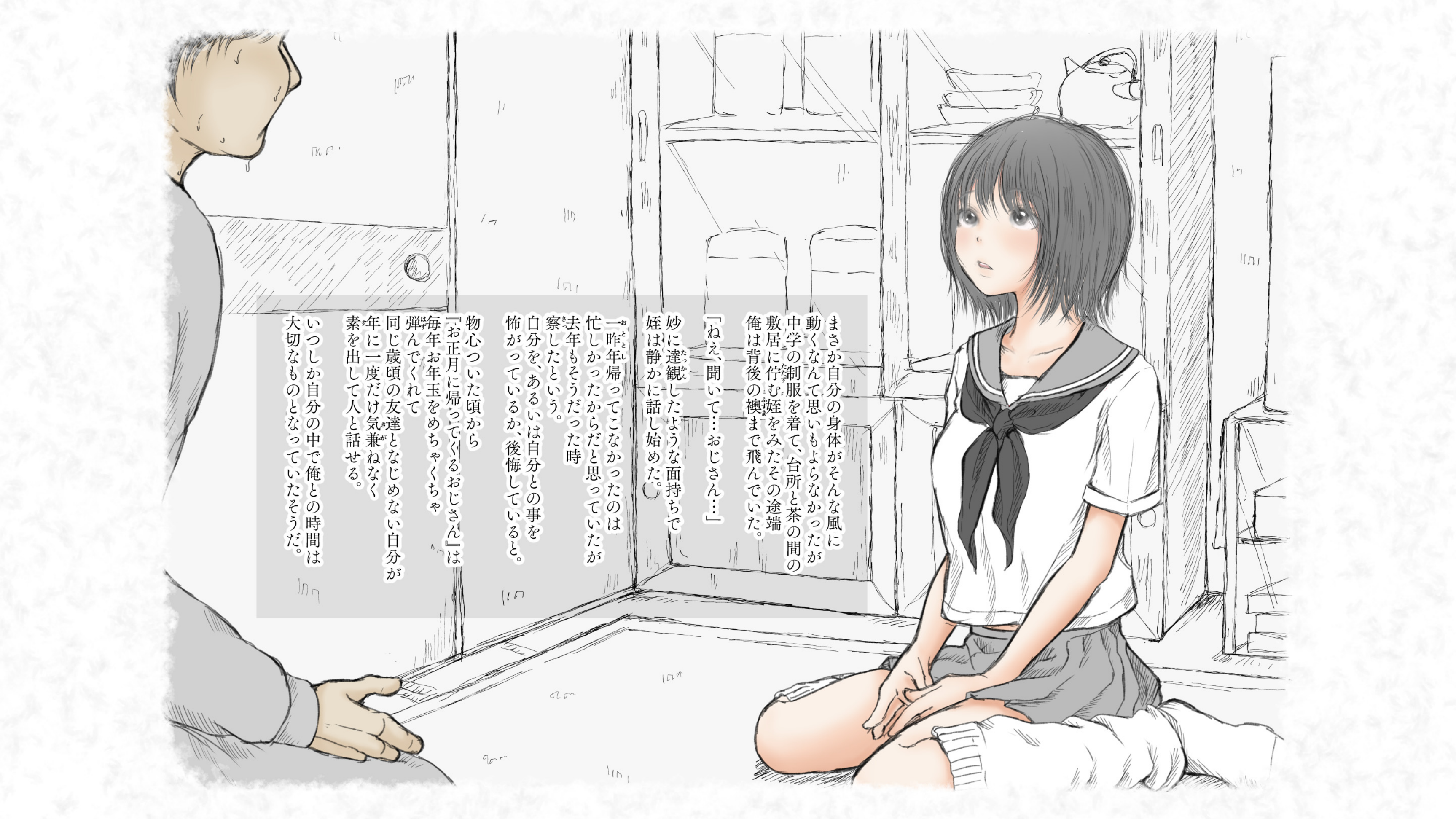
姪も内心はモヤモヤしてて
俺が何も触れてこないなら
あの時の事は今年限りに忘れてしまおう
そんな風に考えてやしないだろうか。）

「結局どうしたらいいんだ：」
「ねえ、おじさん：」



...おはようございます...

...あーっ



まさか自分の身体がそんな風に
動くなんて思いもよらなかったが
中学の制服を着て、台所と茶の間の
敷居に佇む姪をみたその途端
俺は背後の襖まで飛んでいた。

「ねえ、聞いて…おじさん…」

妙に達観したような面持ちで
姪は静かに話し始めた。

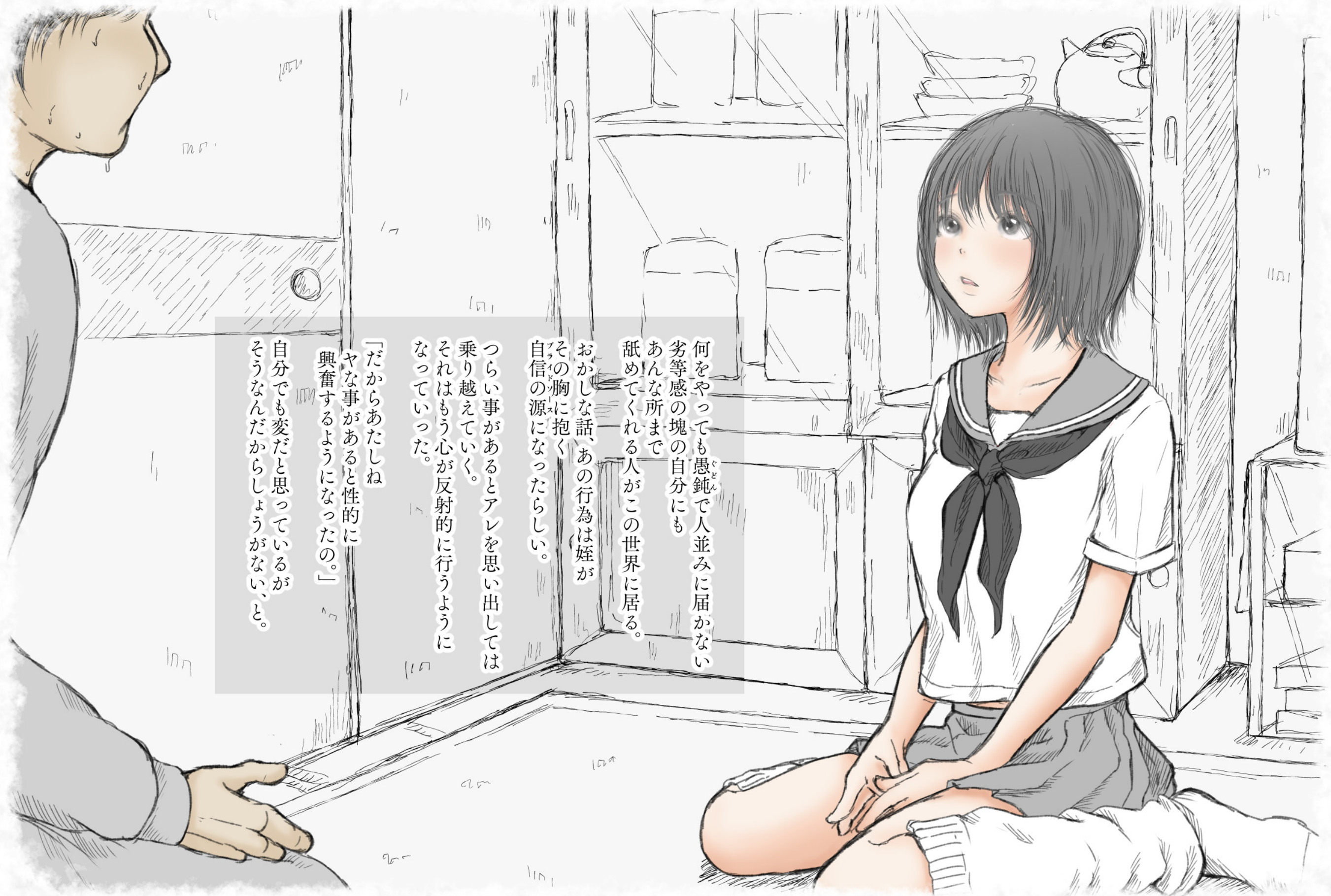
一昨年帰ってこなかったのは
忙しかったからだと思っていたが
去年もそうだった時
察したという。

自分を、あるいは自分との事を
怖がっているか、後悔していると。

物心ついた頃から

『お正月に帰ってくるおじさん』は
毎年お年玉をめちやくちや
弾んでくれて
同じ歳頃の友達となじめない自分が
年に一度だけ気兼ねなく
素を出して人と話せる。

いつしか自分の中で俺との時間は
大切なものとなっていたそうだ。



何をやっても愚鈍で人並みに届かない
劣等感の塊の自分にも
あんな所まで
舐めてくれる人がこの世界に居る。

おかしな話、あの行為は姪が
その胸に抱く
自信の源になったらしい。

つらい事があるとアレを思い出しては
乗り越えていく。
それはもう心が反射的に行うように
なっていた。

「だからあたしね
やな事があると性的に
興奮するようになったの。」

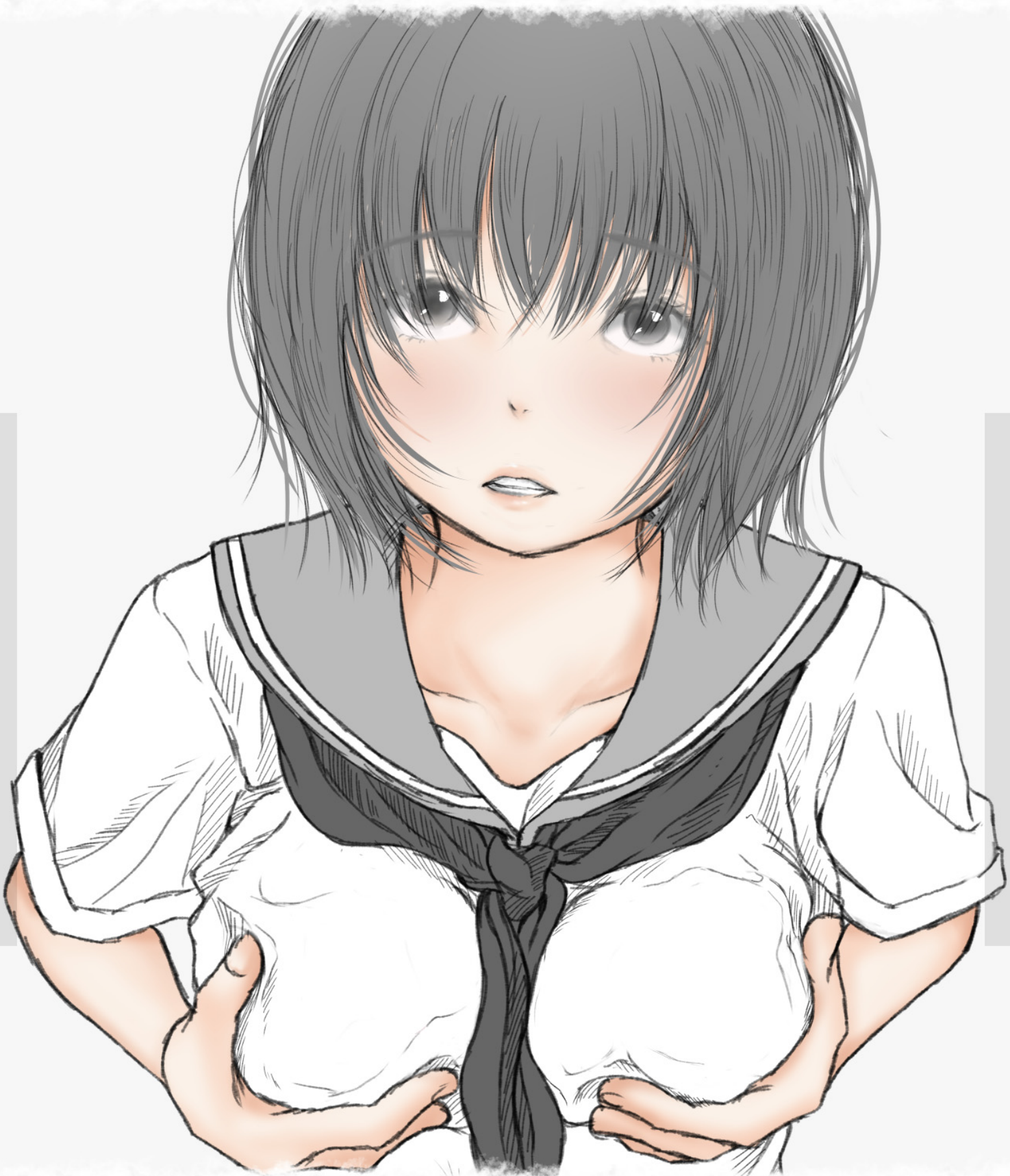
自分でも変だと思っているが
そうなんだからしょうがない、と。

「あたしは小学生の時のあの事
一生誰にも言わない。
そんな恩を仇で返すような事
人の道に外れてる。」

明らかに曲解して恩義を感じてるし
そもそもロリコンを
人の道に沿ってると俺が
思っていないし
こいつやっぱり変わってると思った。

「小学生だからだめだって
あの時言ってたよね。
あたし中学生になったよ。」

頭では現状の整理に手いっぱいなのに
視線だけがひとりでに姪の身体を
分析している。



「あ…胸は大きくなっちゃった…遺伝…
小さいの好きならごめん…」

舐めるように観察している俺に
姪は心底申し訳なさそうに言った。

それにしても、たしかに…
なんだこの土台に対して
不釣り合いな胸は。

こういう体型、ミニマムなんとかって
言うんだっけ…

「ねえおじさんはあたしが怖い？
ちょっと頭おかしいから…」

「は？怖くないし、頭おかしくないよ。
変わってるなとは思うけど。」

物心ついた時から、ややその傾向が見て取れ
それは成長しても変わらずで
小学校では奇抜な発言や行動を
揶揄されていたのは知っている。

クラスに必ず一人はいる

『変わった子』。

俺もこいつの事は普通という範疇から
ズレてるなと確かに感じていたけど
頭がおかしいと
思った事は一度もない。

変わっているといっても
眉根をしかめる類のものではなく
何か異なる目線で世界を見て
自分のルールに則り生きているような
世事に流されやすい俺からすれば
ある種の敬意を抱く特質だった。



だからそれ故でもあったんだ。
その辺の子供とはどこか違うこの姪なら
アプローチしてみて、引かれて
親に報告という
火を見るよりも明らかな予定調和とは
違う結果が期待できやしないかと
あの時、そんな風に計算してた。
思い返しても、ほとほと浅ましい…。

「なんで前とその前のお正月
帰ってこなかったの？」

「だんだん自分のやった事が
怖くなってきたから…だ…。」

口に出してみても

ああこれ以上この3年の自分の心情を
簡潔に説明できるものはないなと思った。

「そっか…。」
「……………」

「さっきも言ったけど
人には言わない。
もしあたしを汚いとか怖いとか
思ってないなら、あの日の続きを…
一生…誰にも内緒の約束で…」

姪は一呼吸おいて
事も無げに言い放った。

「か、彼氏に悪いだろ…」
「彼氏いない。」

「姉ちゃんに殺される…」
「見つかったら…うん…」
「殺害されると思う。」

何を日^ひ和^わってるのかと
我ながら思う。

本来命尽きるまで内側に秘めて
おかなければならない歪な性嗜好を
まだ小4の姪にぶちまけておきながら
逃走…

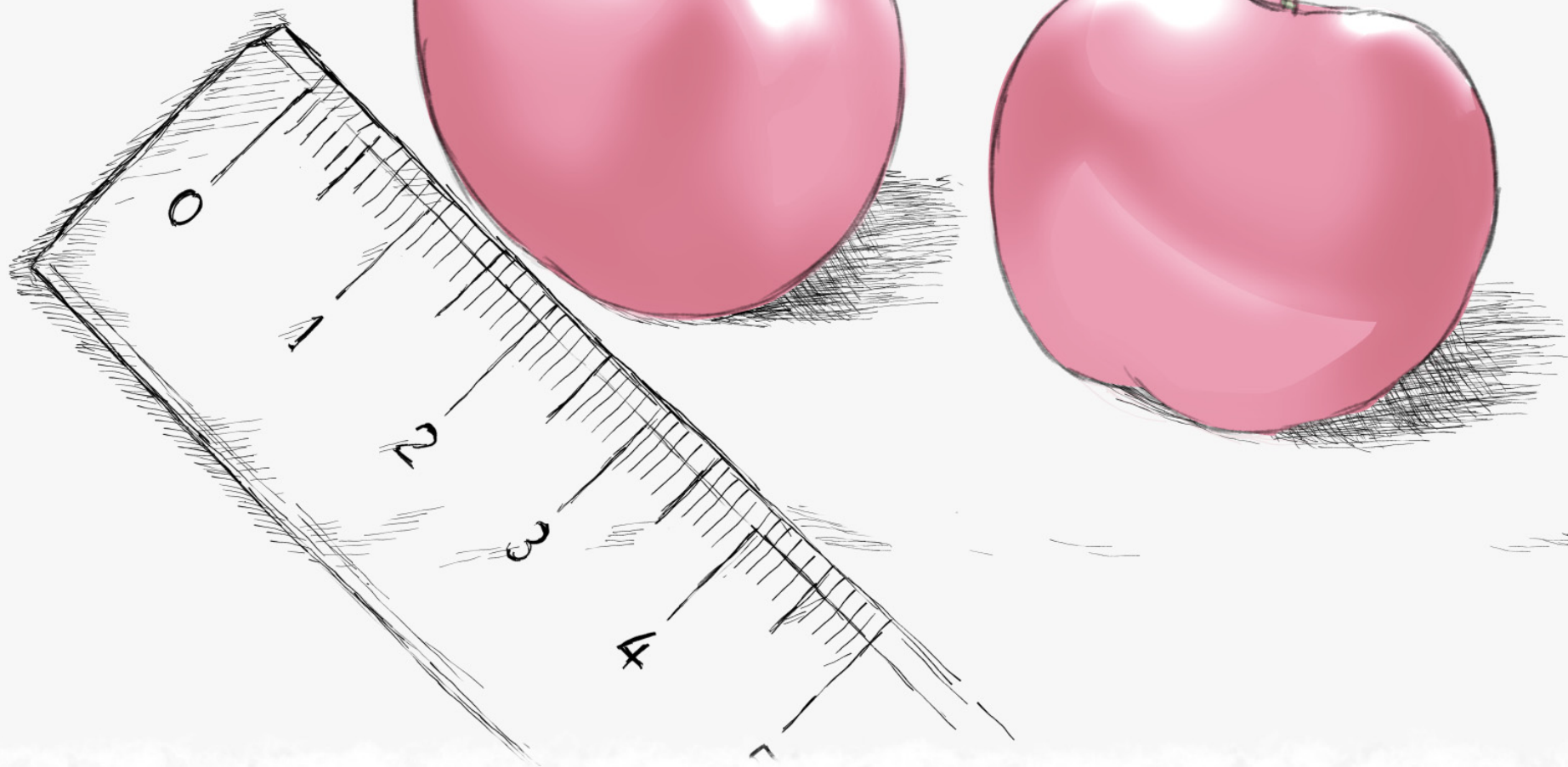
しかし蓋^{かた}を開いてみれば
言わば合意のもとに
実はあのまま、さらなる
淫靡^{いんぴ}な世界を垣間見れていた。

胸がどれだけ膨らんだか知らないが
身体の小さいこいつは
まだ小学生に見えなくもないし
13歳は十二分に
小児性愛そのものだ。

これを逃せば一生無い。
しかもこの姪は随分かわいい部類。
さくらんぼで言えば2L以上の
上玉だ。

どうなっても、本望じゃないか？
夢^夢追い人^人として。
ロリコンとして。

「見つからなければ…いいか…」
「見つからなければ…うん…」



試読版はここまでとなっております。
琴線に触れるものがありましたら
是非ともご購入の程を
よろしくお願い申し上げます。 真咲

こちらはスマホ用文字拡大版の
文字の大きさです。

どうなっても、本望じゃないか？
夢追い人として。

これを逃せば一生無い。
しかもこの姪は随分かわいい部類。
さくらんぼで言えば2L以上の
上玉だ。

胸がどれだけ膨らんだかしのれないが
身体からだの小さいこいつは
まだ小学生に見えなくもないし
13歳は十二分に
小児性愛小児性愛そのものだ。

「見つからなければ…いいか…」
「見つからなければ…うん…」

